

朗読を楽しむ——東急雪が谷BE

2017年6月28日

文学を楽しむ——梶井基次郎「檸檬」

コトバ表現研究所 渡辺 知明

えたいの知れない不吉な塊が私の心を始終圧えつけていた。焦躁と言おうか、嫌悪と言おうか——酒を飲んだあとに宿酔があるように、酒を毎日飲んでいると宿酔に相当した時期がやって来る。それが来たのだ。これはちよつといけなかった。結果した肺炎カタルや神経衰弱がいけないのではない。また背を焼くような借金などがいけないのではない。いけないのはその不吉な塊だ。以前私を喜ばせたどんな美しい音楽も、どんな美しい詩の一節も、平抱がなくなつた。蓄音器を聴かせてもらいにわざわざ出かけて行っても、最初の二三小節で不意に立ち上がってしまいたくなる。何かが私を居堪らずさせるのだ。それで始終私は街から街を浮浪し続けていた。

何故だかその頃私は見すばらしく美しいものに強くひきつけられたのを覚えている。風景にしても壊れかかった街だとか、その街にしてもなまそそしい表通りよりもどこか親しみのある汚い洗濯物が干してあったり、がらくたが転がしてあったり、むさくるしい部屋が覗いていたりする裏通りが好きであつた。雨や風が蝕んでやがて

土に帰ってしまう。と言ったような趣きのある街で、土塀が崩れていたり、家並が傾きかかっていたり——勢いのいいのは植物だけで、時とするどつくりさせるような向日葵があつたり、カンナが咲いていたりする。街である。

時どき私はそんな路を歩きながら、ふと、そこが京都ではなくて京都から何百里も離れた仙台とか長崎とか——そのような市へ今自分に来ていたのだ。——という錯覚を起こそうと努める。私は、できることなら京都から逃げ出して誰一人知らないような市へ行ってしまうたかつた。第一に安静。がらんとした旅館の一室。清浄な蒲団。匂いのいい蚊帳と糊のよくきいた浴衣。そこで月ほど何も思わず横になりたい。希わくはここがいつの間にかその市になっているのだつたら。錯覚がようやく成功しはじめると私はそれからそれへ想像の絵具を塗りつけてゆく。なんのことはない、私の錯覚と壊れかかった街との二重写しである。そして私はその中に現実の私自身を見失うのを楽しんだ。

② 私はまたあの花火というやつが好きになった。花火そのものは第二段として、あの安っぽい絵具で赤や紫や黄や青や、さまざまの縞模様を持った花火の束、中山寺の星下り、花合戦、枯れすすき。それから鼠花火というのはいっすつ輪になっていて箱に詰めてある。そんなものが変に私の心を唆った。

それからまた「びいどろ」という色硝子で鯛や花を打ち出してあるおはじきが好きになったし、南京玉が好きになった。またそれを嘗てみるのが私にとってなんともいえない享樂だったのだ。あのびいどろの味ほど幽かな涼しい味があるものか。私は幼い時よくそれを口に入れては父母に叱られたものだが、その幼時のあまい記憶が、大きくなくて落ち魄れた私に蘇えってくる故だろうか。まったくあの味には幽かな爽やかななんとなき詩美と言ったような味覚が漂ってくる。

① 察しはつくだろうが私にはまるで金がなかった。とは言えそんなものを見て少しでも心の動きかけた時の私自身を慰めるためには贅沢ということが必要であった。二銭や三銭のもの——と言って贅沢なもの。美しいもの——と言って無気力な私の触角にむしろ媚びて来るもの。——そう言ったものが自然私を慰めるのだ。

生活がまだ蝕まれていなかった以前私の好きであった所は、たとえば丸善であった。赤や黄のオードロンやオードキニン。洒落た

切子細工や典雅なロココ趣味の浮模様を持った琥珀色や翡翠色の香水壺。煙管、小刀、石鹼、煙草。私はそんなものを見るのに小一時間も費すことがあった。そして結局、等しい鉛筆を一本買うくらいに贅沢をするのだった。しかしこれももうその頃の私にとっては重くるしい場所に過ぎなかった。書籍、学生、勘定台、これらはみな借金取りの亡霊のように私には見えるのだった。

ある朝——その頃私は甲の友達から乙の友達へというふうに友達の下宿を転々として暮らしていたのだが——友達が学校へ出てしまつたあとの空虚な空気のなかにぼつねんと一人取り残された。私はまたそこから彷徨い出なければならなかった。何かが私を追いたてる。そして街から街へ、先に言ったような裏通りを歩いたり、駄菓子屋の前で立ち留まつたり、乾物屋の乾蝦や棒鱈や湯葉を眺めたり、とうとう私は二条の方へ寺町を下り、その果物屋で足を留めた。

① ここでちよつとその果物屋を紹介したいのだが、その果物屋は私の知っていた範囲で最も好きな店であった。そこは決して立派な店ではなかったのだが、果物屋固有の美しさが最も露骨に感ぜられた。

果物はかなり勾配の急な台の上に並べてあって、その台というのも古びた黒い漆塗りの板だったように思える。何か華やかな美しい音楽の快速調の流れが、見る人を石に化したというゴルゴの鬼面り、疑的なものを差しつけられて、あんな色彩やあんなヴォリウムに凝

り固まったというふうには果物は並んでいる。青物もやはり奥へゆけばゆくほど堆高く積まれている。——実際あそこの人参葉の美しさなどは素晴らしい。それから水に漬けてある豆だとか慈姑だとか。またその家の美しいのは夜だった。寺町通はぐつたいに賑かな通りで——と言って感じは東京や大阪よりはずっと澄んでいるが——飾窓の光がおびただしく街路へ流れ出ている。それがどうしたわけかその店頭の周囲だけが妙に暗いのだ。もともと片方は暗い二条通に接している街角になっているので、暗いのは当然であつたが、その隣家が寺町通にある家にもかかわらず暗かつたのが瞭然しない。しかしその家が暗くなかつたら、あんなにも私を誘惑するには至らなかつたと思う。もう一つはその家の打ち出した廂なのだが、その廂が眼深に冠った帽子の廂のように——これは形容というよりも、「おや、あそここの店は帽子の廂をやけに下げているぞ」と思わせるほどなので、廂の上はこれも真暗なのだ。そう周囲が真暗なため、店頭に点けられた幾つもの電燈が驟雨のように浴びせかける絢爛は、周囲の何者にも奪われることなく、ほしいままにも美しい眺めが照らし出されているのだ。裸の電燈が細長い螺旋棒をきりきり眼の中へ刺し込んでくる往來に立つて、また近所にある鎔屋の二階の硝子窓をすかして眺めたこの果物店の眺めほど、その時どきの私を興がらせたものは寺町の中でも稀だつた。

8/23
① その日私はいつになくその店で買物をした。というのはその店には珍しい檸檬が出ていたのだ。檸檬などごくありふれている。がその店というのも見すばらしくはないまでもただあたりまえの八百屋に過ぎなかつたので、それまであまり見かけたことはなかつた。いたい私はあの檸檬が好きだ。△モンエロウの絵具をチューブから搾り出して固めたようなあの単純な色も、それからあの丈の詰まつた紡錘形の恰好も。——結局私はそれを一つだけ買うことにした。
② それからの私はどこへどう歩いたのだらう。私は長い間街を歩いていた。始終私の心を圧えつけていた不吉な塊がそれを握った瞬間からいくらか弛んで来たともえて、私は街の上で非常に幸福であつた。あんなに執拗かつた憂鬱が、そんなものの一顧で紛らされる——あるいは不審なことが、逆説的なほんとうであつた。それにしても心というやつはなんという不可思議なやつだらう。
③ その檸檬の冷たさはたとえようもなくよかつた。その頃私は肺尖を悪くしていつとも身体に熱が出た。事実友達の誰彼に私の熱を見せびらかすために手の握り合いなどをしてみるのだが、私の掌が誰のよりも熱かつた。その熱い故だつたのだらう、握っている掌から身内に浸み透つてゆくようなその冷たさは快いものだった。
私は何度も何度もその果実を鼻に持っていつては嗅いでみた。その産地だというカリフォルニアが想像に上つて来る。漢文で習つ

た「売柑者之言」の中に書いてあった「鼻を撲つ」という言葉が断れぎれに浮かんで来る。そしてふかぶかと胸一杯に匂やかな空気を吸い込めば、いぞ胸一杯に呼吸したことのない私に、私の身体や顔には温い血のほとぼりが昇って来て、なんだか身内に元気が自覚めて来たのだった。……

1 実際あんな単純な冷覚や触覚や嗅覚や視覚が、ずつと昔からこればかり探していたのだと言いたくなかったほど私に、じつじつと私に、私に不思議に思える——それがあの頃のことなんだから。

私はもう往來を軽やかな昂奮に弾んで、一種誇りかな、気持さえ感じながら、美的装束をして街を闊歩した詩人のことなど思い浮かべては歩いてた。汚れた手拭の上へ載せてみたりマントの上へあてがってみたりして色の反映を量ったり、またこんなことを思ったり、

つまりはこの重さなんだな。

その重さこそ常づね尋ねあぐんでいたもので、疑いもなくこの重さはすべての善いものすべての美しいものを重量に換算して来た重さであるとか、思いあがった諸諦心からそんな馬鹿げたことを考えてみたり——なにがさして私は幸福だったのだ。

どこをどう歩いたのだろう、私が最後に立ったのは丸善の前だった。平常あんなに避けていた丸善がその時の私にはやすやすと入れらるるよう思えた。

2 「今日は一つ入ってみてやろう」そして私はずかずか入って行った。

しかしどうしたことだろう、私の心を充たしていた幸福な感情はだんだん逃げていった。香水の壇にも煙管にも私の心はのしかつてはゆかなかつた。憂鬱が立て罩めて来る、私は歩き廻った疲労が出て来たのだと思った。私は画本の棚の前へ行ってみた。画集の重たいのを取り出すのさ、常に増して力が要るな！——と思った。しかし私は一冊ずつ抜き出してはみる、そして開けてはみるのだが、克明にはぐつてゆく気持はさらに湧いて来ない。しかも呪われたことにはまた次の一冊を引き出して来る。それも同じことだ。それでいて度バラバラとやってみなくては気が済まないのだ。それ以上は堪らなくなつてそこへ置いてしまふ。以前の位置へ戻すことさえできない。私は幾度もそれを繰り返した。とうとうおしまいは日頃から大好きだったアングルの橙色の重い本までなおいっそうの堪えがたさのために置いてしまった。なんという呪われたことだ。手の筋肉に疲労が残っている。私は憂鬱になつてしまつて、自分が抜いたまま積み重ねた本の群を眺めていた。

3 以前にはあんなに私をひきつけた画本がどうしたことだろう。一枚一枚に眼を晒し終わつて後、さああまりに尋常な周囲を見廻すときあの変にそぐわない気持を、私は以前には好んで味わっていたものであった。……

「あ、そうだそうだ」その時私は袂の中の檸檬を憶い出した。本の色彩をゴチャゴチャに積みあげて、一度この檸檬で試してみたら。

（そうだ）

私にまた先ほどの軽やかな昂奮が帰って来た。私は手当たり次第に積みあげ、また慌しく潰し、また慌しく築きあげた。新しく引き抜いてつけ加えたり、取り去ったりした。奇怪な幻想的な城が、そのたびに赤くなったり青くなったりした。

やっとそれはでき上がった。そして軽く跳りあがる心を制しながら、その城壁の頂きに恐る恐る檸檬を据えつけた。そしてそれは出来だった。

2 見わたすと、その檸檬の色彩はガチャガチャした色の階調をひっそりと紡錘形の身体の中へ吸収してしまつて、カーンと冴えかえっていた。私は俟つばい丸善の中の空気が、その檸檬の周囲だけ変に緊張しているような気がした。私はしばらくそれを眺めていた。

不意に第二のアイディアが起こった。その奇妙なくらみはむしろ私をぎよつとさせた。

それをそのままにしておいで私は、なに喰わぬ顔をして外へ出る。

私は変にくすぐったい気持がした。「出て行こうかなあ。そうだ出て行こう」そして私はすたすた出て行つた。

変にくすぐったい気持が街の上の私を微笑ませた。丸善の棚へ金色に輝く恐ろしい爆弾を仕掛けて来た奇怪な悪漢が私で、もう十分後にはあの丸善が美術の棚を中心として大爆発をするのだったらどんなにもしろいだろう。

私はこの想像を熱心に追求した。「そうしたらあの気詰まりな丸善も粉葉みじんだろう」そして私は活動写真の看板画が奇体な趣きで街を彩っている京極を下つて行つた。

幻の街―梶井基次郎「檸檬」論―

本田 孔明

(『文学』岩波書店1994年10月)

梶井文学といえは、ただちに感性の文学という答えが返ってくる。もっとも、そうした言いかたもかなりあいまいであって、もうすこし正確に言うとしたら、感性体験の認識化を目ざしたのが梶井文学だというべきであろう。

〔磯貝英夫「感性の形式―梶井基次郎」〕

この「感性」が冒頭で「えたいの知れない不吉な塊」として姿をあらわすとき

「檸檬」という作品が、その実体をあきらかにしようとする方向には決して進んでゆかないことに注意しておく必要がある。「えたいの知れない不吉な塊」として提出された「感性」のある状態は、結局「何か私を居堪らずさせるのだ」というようになかば説明を放棄した形で再提出される。「不吉な塊」とはむしろ内容を説明することなしにこの言葉のままで放り出されることによって機能しているのだといえる。「不吉な塊」と一個のレモンを等価にしてしまう「感性」とは、まさにこうした突然の飛躍を可能にさせるものなのであり、そこから「それにしても心といふ奴は何といふ不思議な奴だらう」というモノローグが生まれるの

である。「不可思議な奴」と感心してしまふことで、ここでも「感性」の実体は語り手によってうまきはぐらかされ、「幸福な感情」という気分だけが浮かび上がってくる。

「感情」が、外界の事象に対する心のリアクションを引き出す装置であるとすると、一個のレモンとは、「不吉な塊」におさえつけられた「憂鬱」を「幸福な感情」へと変換させるための外界の事象の一つであって、実体化された「感性」ではない。「私」の「感性」とは、決して説明されることのない「不可思議な奴」なのである。

つまり、少なくとも「檸檬」において梶井の書かれざる「感性」の内実を探ることは、不毛な試みに過ぎず、「感性の文学」などといったレッテルは印象批評的な鑑賞の産物でしかないということができる(繰り返すが、これはレッテルを貼ることの無意味さについて言っているであり、梶井基次郎の文学的感性そのものについてではない)。

「感性」ではなく、「感性」がとらえたもの、「感性」を通して読者に語りかけるもの、それらをだけ見るために、とりあえずのところはもう一度「作品を一個の独立した世界として把握、その内的構造をくまなく読み解く」という、あおいささか古色蒼然としたテーゼに従ってみるのも悪くはない。(部分引用)

●小説

- ・檸檬(青空 1925年1月創刊号)
- ・城のある町にて(青空 1925年2月)
- ・泥濘(青空 1925年7月)
- ・路上(青空 1925年10月)
- ・椽の花(青空 1925年11月)
- ・過古(青空 1926年1月)のち「過去」
- ・雪後(青空 1926年6月)
- ・ある心の風景(青空 1926年8月)
- ・Kの昇天(青空 1926年10月)
- ・冬の日(青空 1927年2月。詩・現実 1930年12月号)
- ・蒼穹(文藝都市 1928年3月)
- ・笈の話(近代風景 1928年4月号)
- ・器乐的幻覚(近代風景 1928年5月号。詩と詩論 1928年12月号・第2冊に再掲載)
- ・冬の蠅(創刊月刊 1928年5月号。詩・現実 1931年3月号再掲載)
- ・ある崖上の感情(文藝都市 1928年7月号)
- ・櫻の樹の下には(詩と詩論 1928年12月号)
- ・愛撫(詩・現実 1930年6月創刊号)
- ・闇の絵巻(詩・現実 1930年9月号)
- ・交尾(作品 1931年1月号)
- ・のんきな患者(中央公論 1932年1月号)

梶井 基次郎 (かじい もとじろう)

1901年(明治34年)2月17日 - 1932年(昭和7年)3月24日)は、日本の小説家。感覚的なものと知的なものが融合した簡潔な描写と詩情豊かな澄明な文体で20篇余りの小品を残し、文壇に認められてまもなく、31歳の若さで肺結核で没した。

死後次第に評価が高まり、今日では近代日本文学の古典のような位置を占めている。その作品群は心境小説に近く、散策で目にした風景や自らの身边を題材にした作品が主であるが、日本的自然主義や私小説の影響を受けながらも、感覚的詩人的な側面の強い独自の作品を創り出している。

梶井基次郎は当時のごくふつうの文学青年の例に漏れず、夏目漱石や森鷗外、有島武郎や志賀直哉などの白樺派、大正期デカダンス、西欧の新しい芸術などの影響を受け、表立っては新しさを誇示するものではなかったが、それにもかかわらず、梶井の残した短編群は珠玉の名品と称され、世代や個性の違う数多くの作家たち(井伏鱒二、埴谷雄高、吉行淳之介、伊藤整、武田泰淳、中村光夫、川端康成、吉田健一、三島由紀夫、中村真一郎、福永武彦、安岡章太郎、小島信夫、庄野潤三、開高健など)から、その魅力を語られ賞讃されている。

Wikipedia より